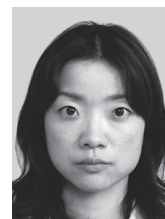




若手理系人のための 大学院教育プログラムの開発



水月ゆう子

サイコムキャリアプロジェクトとは

NPO 法人サイエンス・コミュニケーション（サイコム）は知を駆動力とする社会の実現を目指し、研究者と市民・行政・産業・異分野研究者とのコミュニケーションを促進するための活動を行っている。なかでも、ポストドク問題は政策研究の観点から提言を行うとともに、草の根レベルで解決するため実践的な大学院生・ポストドクキャリア支援のための「サイコムキャリアプロジェクト」を開発・実施している。当プログラムで特に志向しているのは、「キャリアチェンジ」、すなわち異業種へのキャリアをスムーズに行えるような知識・スキルを大学院生・ポストドクなどの若手理系人に提供することである。

大学院重点化からポストドクなど1万人計画により、ポストドク問題が政策により生み出された構造的な問題であるということは広く知られている。平成18年度から「科学技術関係人材のキャリアパス多様化促進事業」により主要大学での本格的な対策も始まっている。

しかし、実際に就職が決まるのは一握りであり問題の抜本的な解決がみえていないことが2007年の分子生物学会でも報告されていた。われわれサイコムキャリアプロジェクトではこのキャリアパス多様化の促進を阻む主要因が、現存の大学院教育にあると考えている。若手理系人の周辺の社会人（大学の教員）は研究職に限られており、研究以外のキャリアの経験者は非常に少ない。したがって、研究以外のキャリアの可能性について示される機会も少なく、就職活動のやり方もわからないというのが現状である。研究職での成功を目指す者にとっては「一生懸命に研究し、多くの論文を書き、学会では大いに議論すること」がキャリアアップ（研究者としてステップアップすることと定義）のために重要であるという点は異論のないところだと思うが、キャリアチェンジ（研究者から他の業種に転職することと定義）については必ずしも成り立たない。

サイコムキャリアプロジェクトでは、キャリアチェンジのための方法論を「満たされていない若手理系人のニーズ」ととらえ、プログラムの開発と実施に取り組んでいる。

プログラムの紹介

サイコムキャリアプロジェクトは博士号取得後、営業・

マーケティング・金融・コンサルタントなど、キャリアチェンジした経歴を持つメンバーにより運営されている。キャリアチェンジの成功事例を調査・分析し、その中の共通点に着目し汎用化することでプログラムの開発を行った。

まず、成功するキャリアチェンジは

- ① キャリアチェンジに必要な情報を収集・分析する
- ② 方向性を決めるための意思決定をする
- ③ キャリアチェンジを実行する

というプロセスを経ると考えている。③は当然必要のことであるが、①や②も重要であると考えている。たとえ、①や②が欠けても③を行えばキャリアチェンジは実現するかもしれないが、「成功した」キャリアチェンジとなる確率は低い。なぜなら、キャリアチェンジに成功するというのは、単純に仕事が見つかるということではなく、自分が望む職場で望む仕事をしているということだからである。

■キャリアチェンジに必要な情報の収集・分析

ずっと大学や公的研究機関で研究に従事していた研究者にとって、企業での仕事をイメージし、現状の自分のキャリアと結びつけるのは難しい。面接の場で仕事内容を聞いて驚いているという研究出身者もいるというが、そのような準備不足の状態では主体性をもってキャリアチェンジに取り組むのは難しいであろう。われわれは「若手理系人のためのキャリア内容紹介」として、さまざまなキャリアの具体的紹介（臨床開発の業務／投資業務／テクニカルサポート業務／マーケティング業務／ベンチャーでの業務など）を行っている。プログラムの作成は実際にキャリアチェンジしてその職種についた博士号取得者が行っており、仕事内容の説明だけでなく、研究出身者としてその仕事に就いたメリットやおもしろさ、自分を活かすポイントという観点を入れている。

また、企業と大学はどのように異なるのか、企業を分析するにはどのような考え方で行うと良いのかというのを「若手理系人のための企業分析」というプログラムで提供している。そのなかでは大学の研究と企業の研究の違いを実感するために「大学発ベンチャーA社の商品開発」というケーススタディーを行い、参加者同士でディスカッションをしてもらっている。

■意志決定

情報収集したのちで希望の職種を決定する際や、複数

社の内定を取得した後でどの会社に行くか決定する際に、意思決定のプロセスが必要になる。このために開発したプログラムが「若手理系人のためのロジカルシンキング」である。これは、各選択肢のメリット・デメリットを把握し、比較検討することによって最適な解を判断するというプロセスを実習形式で体験するものである。論理を単位化しブロックのように積み上げ、すきまがないか確認していく作業は、理系研究者が日常的に行っていることであるが、当プログラムはそれをより意識的に行うためのものである。ロジカルシンキングは、キャリアチェンジの局面で役立つとともに、理系出身者の自己アピールのポイント、「強み」にもなるので、大いに鍛えべきスキルだと考えている。

では、キャリア選択を判断する際に、基準となる拠り所は何であろうか？ それは、自分がキャリアによって何を実現したいか、自分が情熱をもって取り組めることは何か、自分がプロフェッショナルリティをもって提供できそうなことは何か（＝給料をもらうに値すること、あるいは得意なこと）をつきつめて考えることだと思っている。この、自己分析の手法として、「自己分析イメージマップの作成」というプログラムを開発し実習を行っている。イメージマップでは、研究だけに拘らず私生活も含め、好きなこと・得意なことを書き出したり、譲れない条件（金銭面やライフスタイル）など自分の中で優先順位の高いものを書き出していくことにより、参加者が自分のキャリアを「発見」できればというのをねらいとしている。

■キャリアチェンジの実行

キャリアチェンジを実行するにあたり、われわれが重視しているのが自己プレゼンテーションのスキルである。就職の面接に臨んだとき、アピールしたいことが相手に伝わらなければ意味がない。ポストドクが「他人とコミュニケーションがとれない」「研究内容について話せるが自分自身について話せない」「企業に入ってなにができるか伝えられない」と評価されてしまう傾向にあるという記事があった。自己表現には、相手から見たときに自分がどのように映るかを想像する、客観的な視点が必要となる。「若手理系人のための自己マーケティング」は、自分を商品に見立てたとき、相手がどのような価値観でどのような点を魅力に感じるか、というところを分析し、自己表現するためのプログラムである。マーケティングとは、「顧客の満たされていないニーズを発見し、それを満たす最適な商品を作り出すプロセス」とされている。企業にとって、どのような点が自分に求められているのかを考え、わかりやすく訴求することができれば双方にとって満足できる結果になるであろう。特に、研究内容の説明は、専門外の人にとって難解になりやすいので、わかりやすく相手に伝えるための表現方法を考える「若手理系人のための研究紹介方法」というプログラムも実施している。

キャリアチェンジの意義と、われわれの目標

キャリアパス多様化の意義として、科学技術コミュニケーションや知的財産活用の役割を担うことにより、産業が活性化するということが期待されている。特に、コミュニケーションというのは重要な要素で、大学院教育を受けた結果個人のスキル・経験として身についた能力のみが博士課程の財産というわけではなく、その間に知り合った研究者とのネットワークも非常に大きな財産である。実際、キャリアチェンジしたメンバーはほぼ全員が研究室時代の人脈を活用している。それも企業からみると当人の能力の一部とみなされるのである。キャリアチェンジというと研究のキャリアを捨てる、というネガティブな印象を抱く方がいるかもしれないが、むしろ、博士課程まで進んでキャリアチェンジをすると研究からは逃れられないというのが正しい。学部あるいはマスター卒で採用した社員については企業としても新卒として教育を施すが、博士号取得者は年齢からしても専門性からしても専門職の募集・転職枠といったカテゴリーになる。そのため、これまでのキャリアと今後の展望を企業が納得できるよう伝えなければ採用されないが、その分、研究を活かしたオリジナリティの高い仕事ができる可能性は高いのである。

2006年より、われわれは大阪大学・京都大学などでキャリアセミナーを実施し、のべ13回、200名以上の若手理系人にプログラムを体験してもらった。6月に開催された生物学若手研究者の集いでは「若手研究者のキャリアパス 生物学における学生の進路」というシンポジウムでキャリアチェンジについての事例を紹介させていただき、8月に開催された日本生物工学会の大会では、「カンタン！研究の背景を持たない人たちとの研究内容の共有術」プログラムの実施をさせていただいた。この時に行ったイメージマッピングのためのブランクシートは<http://www.success4rikei.com/>から入手できる。イメージマップの作成法について全5回のメールセミナーも受講できるのでご興味があればぜひ入手していただきたい。

生物学は産業応用を志向した学問分野であるので、キャリアチェンジによっても能力を活かしやすい領域だと思われる。将来は研究を志望するという方が大多数だと思うが、研究の経験を活かしながら違う職業に就くということに興味がある方がいればぜひご連絡をいただきたい。

今後も若手理系人にプログラムを体験し、キャリアを築くためのお手伝いをさせていただきたいと思っている。現状は、1～3回のプログラム体験会が中心であるが、今後はプラクティカルブックを刊行し、大学院生の教育プログラムとして完成させていきたいと思っている。われわれの活動を通して、若手理系人のキャリア問題が解決に向かうことを願っている。